

信じてみる

永井 玲衣
(哲学者・作家)

「問い」とは、常に既にもうあるものだ。でも「ない」ことにされていることがあるのではないか。あるいは、「問い」があることが苦しくてたまらない、という思いでいっぱいになることもある。なぜ生きているんだろう。友達とどこまで仲良くしなきゃいけないんだろうか。死ぬのが怖いけど、どうしよう。将来の夢って決めなきゃだめ？「問い」は簡単にはいなくなってくれない。じゃあ、どうやっていっしょに生きてらいいのかを、考えなきゃいけない。

私たちには考えていることがある。「問い」がある。子どもだって、大人だって、誰だって、ある。でもそのことについて話せる場が、とても少ない。だから、話せる場を、いっぱい、一生懸命作らないといけない。これは大人の責任だ。

でもどうだろう。「対話」は嫌われている。求められているのに、嫌がられている。不思議なことだけど、実感としてはよく分かる。学級会は退屈だ。話し合いの雰囲気も最高に居心地が悪い。考えを話さなきゃいけない、「いいこと」を言わなきゃいけない、あの空気が私は大嫌いだった。

だから私は考え直すことにした。「対話」をもっといろんな人がそこにいやすい場にしたらいんじゃないか。対話では、「いいこと」を言うよりも、聴くことをだいににする。急ぐよりも、ゆっくりすることを大切に。答えを求めるよりも、考える過程を重視する。「大丈夫じゃない」よりも「大丈夫」と思える場を作る。

考えを戦わせたり、競わせたりするのはなく、互いの声を「聴き合う」場にする。「違う意見の人と話したくない」という声もよく聞く。それこそ、人と話す場を、みんなが嫌がる理由の一つになっている。でもやっぱり浮かぶのは、じゃあ「同じ意見」なんてものが果たしてあるのだろうか、という疑問だ。私たちは信じられないほどにばらばらで、全く同じということはあるにない。だからといって、全くもって違うということもない。私たちは、ばらばらだが、重なる部分がある。そして、重なるところもあるが、やはり違う。

そんなあたりまえの事実を、まずは思い出すことが、今、必要なかもしれない。

25 20 15 10 5

子どもの世界でも、大人の世界でも、あいつは味方だけであいつは敵とか、あいつは違うとか、そんなふうに分けてしまう。楽だけど、疑わしい。

ばらばらであることと、独りぼっちであることは違う。ばらばらだからこそ、私たちは誰かの言葉を聴きたいと思うし、いっしょにいられる。ばらばらだから、誰かに助けてもらったり、誰かを助けたいと思ったりする。

もしあなたが「問い」を持っていて、それにいっぱいいっぱいになっているとしたら、誰かに聞いてみるといい。相手が自分と全く同じ人間だったら聞く必要はない。違う人間だから、違う世界が生まれる。「こんなもんだ」と思っていた世界が、全く見知らぬ姿をとり始める。怖いかもしれないけれど、少しほっとはしないだろうか。

それにこう考えることもできる。「問い」は、あなたにただ意地悪をしてくる存在ではなく、あなたに「まだ、分からないぞ、もっと考えてみる。」と励ましてくれる存在でもある。私は「どうせ、こうなんでしょう。」と世界に対してふて腐れた子どもだった。だけど「問い」は私を突っついて「本当に？」と話しかけてくる。厄介で、うるさい友人だ。

いいからさっさと「正解」が欲しいと、思う人もいるかもしれない。分からないことまみれだったら、生きにくい。でも「正解」がしつくりこなかったとき、もっと生きにくい世界が広がってしまう。困ったなあ。

「問い」も他者も対話も、思っているほど嫌なやつじゃないかもしれない。ちよつとだけ信じてみるのはどうだろう。一人で信じてるのが不安だったら、いっしょに信じてみよう。信じてるのが不安だったら、まあとにかくいっしょに考えよう。人生は長いのだ。



永井 玲衣 (ながい れい)

一九九一年、東京都生まれ。問いを深める哲学対話や、政治や社会について語る活動をしている。詩と植物園と念入りな散歩が好き。

..... 20 15 10 5